



「ひらほく新聞」で検索！
★平成最後の感謝106号★
<http://www.hirahoku.com/>
☆ぜひ、バックナンバーをどうぞ！

発行所 読売センター平塚北部 (ひらほく) 山本 直 〒254-0013 神奈川県平塚市田村9-4-32 電話 0463-54-2807

大切な思い 天皇メッセージ



小学館 10000円+税

「沖繩」「大震災」「中国・韓国」「戦争と平和」……。皇太子時代から44年間、明仁天皇にいただいた節目節目の大切な「お言葉」。平成最後の「ひらほく新聞」では、私たち平成を生きた日本人が、ぜひ心に留めておきたい、託された思いを書き『天皇メッセージ』(矢部宏治著)よりお届けいたします。

はじめに より抜萃

平成という時代が、ちょうど30年間で幕を閉じようとするいま、日本は文字通り、大変な曲がり角に立っています。そうした時代のただなかにあって、象徴天皇という大きな制約のもと、折にふれて発信されてきた明仁天皇の考え、抜かれたメッセージ。

その根底にあるのは、

「平和国家・日本」という強い思いです。

ときには我が身を危険にさらしながら、日々くり返される大変な努力の果てに、ようやく実現されるものだということを、それらのメッセージは教えてくれています。

そうした長期におよぶ思索と、大変な自己犠牲の中からつむぎ出された「光もつ言葉」の数々を、ひとりでも多くのみなさまに知っていただければと思います。

“I shall be Emperor.” 「私は必ず天皇になります」

これは明仁天皇が15歳の春(1949年4月)、学習院高等科の最初の英語の授業で、「将来、何になりたいかを書きなさい」という課題に対して英語で書いた回答です。

この言葉の真意を明仁天皇は40年近くたったのち、次のように説明されています。

「普通の日本人だった経験がないので、何になりたいと考えたことは一度もありません。皇室以外の道を選べると思ったことはありません」(1987年9月/即位の1年4ヶ月前、アメリカの報道機関からの質問に対する回答/英文)

明仁天皇の原風景として語られるシーンに、敗戦直後、疎開先の日光から戻ってきたときに見た、焼け野原になった東京の町があるといわれます。(1945年11月)

重要なのは、その焼け野原になった日本という国の復興が、自分の肩にかかっている、そのとき11歳の少年が本気で思い定めていたということ。

「いまは日本のどん底です。(略)これからは苦しいこと、辛いことがどのくらいあるかわかりません。どんなに苦しくなっても、このどん底からはい上らなければなりません。(略)つぎの世を背負って新日本建設に進まなければなりません。それらもみな、私の双肩にかかっているのです」(1945年8月15日の作文)

慰霊の旅・沖縄

1975年(昭和50年)7月17日、明仁皇太子は沖縄海洋博の開会式出席のため、美智子妃とともに那覇空港に到着しました。

肌がヒリヒリするような強烈な日差しの中、皇太子ご夫妻は、午後0時40分に空港を出発し、車で沖縄本島の最南端へ向かいました。「ひめゆりの塔」を始めとする沖縄戦の南部戦跡をめぐる、慰霊の祈りをささげるための旅でした。

「石ぐらいい投げられてもいい。そうしたことに

に恐れず、県民のなかに入っていく」

沖縄訪問直前、周囲にそう語っていた明仁皇太子ですが、この日、皇太子をめぐって投げられたのは「石ぐらい」ではすまなかったのです。

午後1時5分、那覇空港から南部の戦跡に向かう皇太子の車列が、戦争中、もつとも悲惨な戦いが展開された本島最南端の糸満市に入ってから数分後に最初の事件。左手に立つ白銀病院から10数本のガラス瓶やスパナ、石などが車列に投げつけられ、後続の警察車両を直撃。さらにその後到着したひめゆりの塔では、塔の横の洞穴から這い出してきた沖縄解放同盟の活動家、知念功に火炎ビンを投げつけられ、現場は大混乱におちいりました。

それでも明仁皇太子はスケジュールを変えず、煙を吸い込んだ服を着替えず、2キロほど離れた海岸近くにある次の慰霊の地、「魂魄の塔」(軍人も民間人も、日本兵もアメリカ兵も分けへだてなく、身元不明者の戦死者すべての遺骨を収集した沖縄で最初の慰霊碑)へ向かいました。

この長い一日がようやく終わろうとする午後10時、次の「談話」が報道陣に文書で配られました。

「過去に、多くの苦難を経験しながらも、常に平和を願望し続けてきた沖縄が、さきの大戦で、わが国では唯一の住民を巻き込む戦場と化し、幾多の悲惨な犠牲を払い今日にいたったことは、忘れることのできない大きな不幸であり、犠牲者や遺族の方々のことを思うとき、悲しみと痛恨の思いにひたされます。(略)

「私に託された多くの尊い犠牲は、一時の行為や言葉によってあがなえるものでなく、人々が長い年月をかけてこれを記憶し、一人一人、深い内省の中にあつて、この地に心を寄せ続けていくことをおいて考えられます」

これから自分は国民と共に長い年月をかけて、沖縄が過去に払った尊い犠牲に対し、記憶しつつ、考えつつ、心を寄せつつ、このことを約束しますという、皇太子の明確なメッセージでした。

次の世代へ

「私が天皇の位についてから、ほぼ28年、この間は、我が国における多くの喜びの時、また悲しみの時を、人々と共に過ごして来

ました。私はこれまで天皇の務めとして、何よりもまず国民の安寧と幸せを祈ることを大切に考えて来ましたが、同時に事にあたつては、時として人々の傍らに立ち、その声に耳を傾け、思いに寄り添うことも大切なことと考えて来ました」

2016年(平成28年)8月8日、明仁天皇が自らの退位について語られたメッセージ、その約11分の映像の中で語られていたのは、美智子皇后と共に、迷いの中から長い年月をかけて築き上げてこられた「象徴天皇」という、新しい時代の天皇のあり方についての真摯なお考えでした。

「平成が戦争のない時代として終わろうとしていることに、心から安堵しています」(2018年12月23日)

次の徳仁(なると)天皇と雅子皇后の時代になっても、長い歳月をかけて築かれたこの新しい天皇制の形は、揺るぎなく受け継がれていくことでしょう。そのことを読者のみなさまとともに心から喜びたいと思っています。

◎長年の超愛読紙「みやざき中央新聞」では過去の社説の朗読動画【音で聴くみやざき中央新聞】を定期的に配信しています。その中から昨年末にアップされた一話をご紹介します。

どんな仕事も原点は「心を込めて」

みやざき中央新聞
2007年11月12日号
編集長 水谷もりひと

元夜間中学校教師、松崎運之助さんの話を聞いた。
夜間中学校は、戦前、戦後の貧しい中で十分な教育を受けられなかった人たちのための学校だ。そこで読み書き、計算など、小学校レベルから教えてくれる。

国語の授業で、松崎先生は「ハガキを書く」という宿題を出した。何でもいからハガキの裏に好きなことを書いて投函する。宛先は松崎先生のアパートだ。
数日後、先生のアパートに次々とハガキが届いた。ただ一人、イノさんからのハガキだけが届かない。イノさんは当時30代の左官職人だった。「ちゃんとポストに入れたのに……」、イノさんは残念がっていた。

ハガキのことを忘れた頃、一枚の不思議なハガキが松崎さんのアパートに届いた。何度も書いたり消したりしたらしく、住所のと

ころは黒くなって、ほとんど読めなかった。「まっさきみちのすけさま」という文字だけがろうじて読めた。「こんなので届くわけがない。なんで届いたんだろう」と松崎さんは思った。

よく見るとハガキの隅に地図が書いてあった。「やきとりや」と書かれ、そこから矢印がアパートの絵に伸びていた。そして3番目の部屋が塗りつぶしてあり、「ここ」と書かれていた。

「せっかく住所を書く練習をしたのに、なんで地図なんか書いたの？」と聞くと、「やっぱり目印があったほうが配達しやすいんだよ」とイノさん。

数年後、松崎さんはこの話を地域の公民館の講演会で話した。講演後、一人の男性が近寄ってきた。顔を見たら目が真っ赤になっていた。「先生の今日の話にどれだけ励まされたかわかりません」とお礼を述べた。男性は長年、郵便配達をしていた。一軒一軒手紙を運ぶ仕事に誇りと喜びを感じていた。

どんなに読みにくい字も、想像力を働かせながら読み取り、必ず宛先まで送り届けた。それが彼にとって「心を込めて仕事をやる」ということだった。台風の日も、年末年始も、休まず

配達を続けた。

一日の仕事が終わると、みんなでお茶を飲みながら、「あそここのばあちゃんさんが……」とか「あそここの娘さんが……」と、地域の話題に花が咲いた。

やがて職場に郵便番号を読み取る機械が導入され、合理化が進んだ。配達の仕事は学生アルバイトでもできるようになった。気がつくと同僚たちはいろいろな部署に配置転換されていった。

男性は配達の仕事に喜びを感じなくなっていた。そんな時、松崎さんの話を聞いた。

「地図付きのハガキの話を聞いて、昔の懐かしい思いがこみ上げてきました。普通ならそんなハガキは『宛先不明』で処理すればいいんです。だけどその配達員はきつと、そのハガキを手にした時、自分の原点を思い出したんだと思います。『これを必ず届けなきゃ』って。私にはその気持ちかわかるんです」と、男性は涙をポロポロこぼしながら話した。

どんな仕事でも今やIT化やデジタル化など合理化は避けられない時代である。だが、どんなに状況が変わっても、「心を込めて仕事をやる」、やっぱりこれが仕事の原点だと思ふ。(おわり)

年末年始、大雪でも、台風でも休まず配達。配達関係だからこそ、このお話は、とても心に沁みました。

そして、おせっかい心から、ある方に教えたくくなりました。その方は、一年ほど前に変わって現在配達してくれている郵便屋さん。

「ぜひ観て下さい」と検索方法をお教えたところ、次にお目にかかったときにとても良かった、感動したと感想をいただきました。そして、その方から3月初めに、こんなご挨拶が。

「3月末で定年退職、最後今月いっぱいしっかり届けさせていただきます」。

出会いと別れの季節、皆様の新生活に幸あれと。

たった一人の卒業式

学校に登校できず、卒業式にも参加できなかった生徒がいました。

先生方は、それでもその生徒に卒業式をさせたいと。午前中の卒業式が終わわり、午後から第二の卒業式をやることにしました。その生徒一人の卒業式です。

先生方は、広い会議室に紅白幕を張り、花も午前中に使った物を持ってきました。校旗も置きました。会場は体育館から会議室にな

りましたが、体育館と同じもので会場を作りました。午後になり、その生徒は母親と一緒に来ました。

母親も本人も校長室で卒業証書を渡されて終わると思っていたようでした。

会議室でその生徒一人の卒業式が始まりました。

会議室の中央に置かれた2つの椅子には、本人と母親が座りました。校長、教頭、教務、そして3年担当の職員が全員会場に集まりました。

開式の言葉
卒業証書授与
校長先生の話
など、午前中の卒業式と同じように進めました。

音楽もCDプレーヤーで流すのでなく、放送室から校舎全体に流しました。

閉式の言葉 卒業生退場

校舎全体に静かに流れる音楽に合わせて、母親と一緒に会議室のドアを開けた瞬間、全職員が廊下で待っていたのです。

卒業おめでとう！と。全職員でお祝いの言葉を伝えたのです。母親も本人も、顔をくしゃくしゃにして、泣いていました。

職員は、それだけではありませんでした。昇降口から母親と一緒に外に出た時で

す。校舎の二階から一人の生徒のために、シャボン玉を飛ばしたのです。

涙いっぱい流しながら空に舞うシャボン玉を見上げる生徒。

その姿を二階から見ていた職員。みんな涙、涙でした。頑張れ！

人生はこれからだ！(終)

◎この春、神奈川県内のある公立中学校で実際に行われた感動溢れる卒業式のお話。「子どもの心をつかむ名物校長」からのご報告でした。協力して職員みなで生み出した手作り卒業式の体験は、生徒の貴重な一生の思い出、将来の大きな糧となることでしょう。

平成の象徴 野球を愛した イチロー

「象徴天皇」という在り方を歩まれてきた明仁天皇の「平成時代」とは重要な28年間をプロの野球人として世界の第一線で駆け抜けた、まさに「平成の象徴」と呼びたいイチロー選手。自らを徹底的に律する行動、立ち振る舞い……そして紡ぎ出された数々の光り輝く教え、名言。これまで長きに渡り、私たち皆が勇

気とそして、熱いエネルギーをいただいていた。ただただ感謝に堪えない。

貫いたのは「野球を愛した」と、変わることはない。野球を愛し、情熱を注ぎ実践。それを貫き通したからこそ、神様が用意してくれたギフト、「後悔などあろうはずはない」現役最後の舞台。続く深夜の引退会見でも、有難く数々のイチロー節をいただいた。

子どもたちへ。「自分が好きなもの、熱中できるものを見つけた。見つければ、自分の前に立ちほだかる壁に向かっている」。

「あくまで秤(はかり)は自分の中にある。それで自分なりにその秤を使いながら、自分の限界を見ながらちょっと超えていくということを繰り返していく。そうすると、いつの間にかこんな自分になっている」。

「メンタルを鍛える、つまり心を鍛えるというのは、自分に必要なことを続ける努力をすることだという。まさに「小さなことを積み重ねることが、とんでもないところへ行くただ一つの道」という教えだ。

平成に続く新時代、偉大なイチローの背中を追い、目指す高みへ登る若人たちが、一人でも多くの、人に喜びを与えられる新たな象徴、誕生を期待する。